

選評

白木菜保子

逸見一信筆「五百羅漢図」と近世後期における戒律復興

本論文は、増上寺に遺る逸見（狩野）一信筆「五百羅漢図」制作の背景を、史資料の渉猟と精緻な検討、そして仏教史研究の成果をも踏まえ、初めて明らかにしたものである。一信については従来、その新奇にして特異な画風が注目されてきた。それだけに、大徳寺伝来五百羅漢図を嚆矢とする先行図像の踏襲が江戸期まで行われてきたと確認されている中、一信による本作品がこの伝統に拠っていないことは指摘されてきたが、画家の特異な個性に帰するものとする論調が一般的であったことは否めない。しかし本論文では、これまでに紹介されてきた資料である「新図五百大阿羅漢記」を詳細に読み解き、ここに記された「梵土の古儀」という言葉を手掛かりとして、本図制作の背景を近世仏教における戒律復興の潮流に求めている。

筆者はまず、一信筆「五百羅漢図」制作にあたり制作方針を指導した増上寺の学僧の一人、大雲による「新図五百大阿羅漢記」の内容を紹介する。その中で特に「制作方針」の項を挙げ、大雲が指導した「梵土の古儀」の具体的な内容が一信描く本作品の複数幅に色濃く投影していることを指摘する。また、袈裟の着用法を図示した中西誠應撰『畫像須知』との密接な関係についても、図像を挙げて指摘する。そして中西『畫像須知』が、江戸中期の上方で戒律復興を推進した慈雲らが執筆した書物を参照していることから、本作品成立の背景には、増上寺の学僧にも浸透していた戒律思想があったことを述べる。

次に筆者は、本作品に現れた「梵土の古儀」の様相を、画中に描かれた袈裟と法具の検討によって明らかにする。とりわけ『畫像須知』が出典とした慈雲『方服図儀』に収められた袈裟の図像と本作品の各幅に描かれた袈裟を対照させて検討を加えた作業の成果である資料（表1）は非常な労作と言える。戒律にかなった服制を正しく描くことへのこだわりがあったことを明確に示す資料となり、そしてそれがすなわち戒律重視を旨とした大雲ら増上寺の学僧が持っていた問題意識を示すことになるからである。

さらに筆者は江戸期の仏教界における戒律思想が「超宗派的」なものであったことを、これを提唱した慈雲から本作品の制作方針を策定した大雲までの人物関係、法脈でたどる。

本論文は、先行研究を踏まえながらも、本作品制作にあたっての増上寺学僧の関与の在り方を新たに具体的に提示した意欲的な研究である。そしてこの研究は、全百幅という大部な作品の個々の画幅を慎重に、かつ丁寧に観察、分析した成果によって裏付けられている。また本論文は、既出の資料を詳細に読み解くことによって、隠されていた作品の制作背景に関する糸口をつかみ、そこからさらに諸資料との具体的な比較を通じて得た成果が表れており、優れて誠実な研究と言える。

以上の理由により、白木菜保子氏に『美術史』論文賞を贈り、その功績を称えるものとする。